[……自分に厳しく 相手にやさしく……]

苫小牧カントリークラブにて歌手の松山千春さんとプレイ。

Nobuharu Ban 坂 信春

保全通運有限会社　取締役営業部長
出身／名古屋市生まれ
血液型／ＡＢ型
信条／今日も一日よかったなと思いながら日々すごすこと
好きな言葉／「愛してるよ」
嫌いなこと／ありません

愛産協のゴルフコンペでは、いつも上位に顔を出す坂専務は、なんとオフィシャルハンディ1。趣味の域はとっくに越えて、たびたび大会に出場し、大きな賞もたくさん頂いているそうです。これはひとつ、ゴルフの神髄をお聞きしなくては、ということで、春日井の御自宅に花井さんがおじゃまします。

●●●

シングルプレーヤーになるまで

――シングルプレーヤーで、しかもハンディ1の方というと、私には神様のように思えます(笑)。クラブを握るきっかけは、どういうことだったんですか。

坂『かれこれ20年くらい前だねえ。まあ、普通のサラリーマンゴルフですよ。弟がね、私より早くやってて、お客さんづき合いで私もやるようになったんだね。』

――すると手ほどきは弟さんですか。

坂『最初はね。弟があちこちのプロにいろいろ聞いてきては「兄貴こうだぞ、ああだぞ」と教えてくれて、ふーん、そうかなあ、こうした方がいいがなあ、とかね。全くの我流ですよ。』

――我流でシングルになれるんですか…。スランプとか、フォームに悩むとか苦しいこともいっぱいあったんでしょうね。

坂『それがねぇ…あんまりないんだなあ（笑）。ゴルフとはどういうものか、なんてよく聞かれるけども、ただ無我夢中でね、やってるうちに友達も増えて、結果として振り返ってみたらこうなってた。そりゃあ回数は随分やりましたよ。クラブチャンピオンを獲った年なんかは、女房に言わせるとものすごかったらしい。そう言われて数えてみたら、250ラウンドぐらいになってた（笑）。でもねぇ、会社こそこそっと抜け出してやってるんだからね（笑）。』

――（飾ってあるタイトルを見て）富士カントリー可児クラブのクラブチャンピオンを随分獲ってらっしゃいますね。

坂『10年で4回獲りました。最初が平成元年、そして3年、4年、6年かな。平成2年には理事長杯もいただきました。』

――最初にその栄誉に輝いた時はどんなお気持ちでしたか。

坂『まさかクラブチャンピオンを獲れるとは思ってなかったからね。もちろん感激したし、びっくりもした。予選をなんとか通過できたらいいな、ぐらいしか考えていなかったもんだから(笑)。ただ嬉しかったのはね、「本当のアマチュアのチャンピオンが誕生した」と言ってもらえたこと。それまではクラブチャンピオンというのは、学生からゴルフをやってて、プロを断念して、という人がほとんどだったらしいんだね。私のように独自でゴルフを勉強して、仕事しながら、というのは珍しかったんだと思います。』

――それにしても10年で4回というのは、すばらしいと思います。実力プラス、コースとの相性でしょうか。

坂『そうなんですよ。富士可児のメンバーになったのは12年前だけれど、ここはコースが長いんですよ。岐阜県でも1、2を争うコースで、フルバックで7100くらいある。普通は6700～800だからね。で、私のとりえというのがね、飛ばすことなんです（笑)。』

――ピッタリのコースですね（笑)。

坂『最初に富士可児でハンディをもらったのが12だったねえ。12年前です。それまでは15だったから、あ、こんなにと。』

――じゃあそれまでもコンペなんかでドラコンを取りまくっていたんですね。

［……自分に厳しく　相手にやさしく……］

坂『自慢たらしく聞こえたらイヤなんだけど、私が出ていく競技にはドラコンがなかった（笑）。コンテストにならん、て言われてねえ。今は大したことないけれども、それくらい飛んだんですよ。体格もいいけれど、飛ばすということ、これについては素質があったんだね。

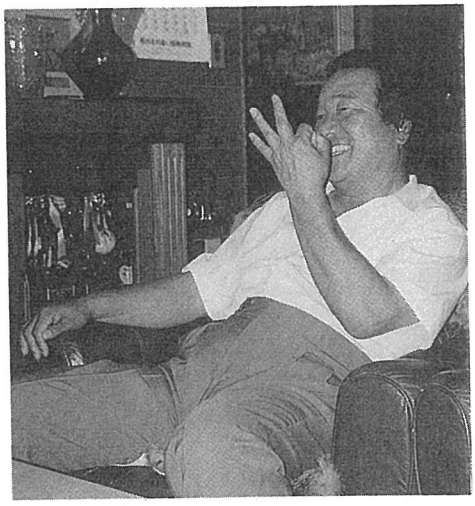
――飛距離というのは素質ですか、やはり。

坂『私はそう思うねぇ。体格がいいに越したことはないけれど、何か持って生まれたものがあるような気がするんです。他の方を見ててもね。まあそれも昔のことになりつつあるかな。かつてはね、ボールは糸巻だし、ドライバーもスチールシャフトでしょ。今はクラブやボールがどんどん良くなって、飛距離はお金で買える時代と言われている。でもアプローチとパターだけは、そうはいかないね。これはゴルフの、というかシングルプレーヤーの神髄ですよ。』

●●●

シングルプレーヤーのマナー

――（応接間の窓から庭を見て）あそこに作ってあるのは練習用のグリーンですか。



坂『そうそう。競技とか行く前にちょっとね。3時間とか4時間前に起きてやるんですけれど、ちょっと寝坊してそれをやらないとダメだね。今は高麗にしてあるんだけど、前はベントにしてた。ところがね、ベントにすると、猫が用足しに来てみんなダメにしちゃう。これも芽が出るまで、柵をしたり、シートを敷いたり大変だった。』

――やはり並々ならぬ苦労があるんですね(笑)。シングルプレーヤーになって、それまでと変わったこと、気をつけるようになったことってありますか。

坂『富士可児に、私の尊敬する先輩で諸永さんという方がいらっしゃるんだけど、私はこの方からプレーヤーとしての精神のようなものを教えていただきましたね。今でも印象に残っている言葉があるんですが、諸永先輩がね、「坂ちゃん、シングルプレーヤーは皆が見ているんだぞ」っておっしゃるんですよ。それでね、ああ、マナーに気をつけないといけないな、他の人の手本になるんだからなと、そう思ったね。それから1、2年してタバコもやめました。』

――マナーの完成度も含めて、シングルプレーヤーと誇りを持って言えるんでしょうか。

坂『そうだね。私は少し気になるんだけれど、グリーンで、コインでマークする人がいるでしょう。マナーのきれいな人は、ゴルフ場のマークを使いますよ。コインだとボールの下へ入り込んでマークしてしまうんでね。すると人間の心理として1ミリでも2ミリでもカップに近づきたいから、今度はコインの前へボールを置いてしまう。ささいなことだけど、スポーツである以上、やっぱりキチッとしなければね。そういうのがプレーの端々に出てくるんです。

――人格がわかってきますか。

坂『そこまでは言わないけれどね。ゴルフは自分に厳しく、相手に優しく、だから（笑）。これを忘れなきゃ大丈夫。』

―― そういった紳士的な考え方や行動は、やはりプレーを通じて培っていくものなんですか。

坂『例えばね。パターに入る時やドライバーを振り上げた時、誰かがヒソヒソッとでもなにか喋ったり、ワサワサッと動いたりしたらもうダメだものね。でもそれをその人達のせいにするんじゃなく、そういうことを克服するトレーニングをする。私のやり方はね、例えばパターの時、「旗立てとくからキャディさん先に行ってていいよ」という。するとクラブを持つ音や、カートが動く音がする。雨の日だと長靴やカッパの音がガサガサとする。そういう中でパターをやってみる。

―― はあー、あえて自分に試練を課すんですか。やっぱり違いますねぇ…。艱難辛苦、汝を…ですね。

坂『しかし、体力というのはシビアなものだねぇ。この間、中部アマの試合があって、それで勝ち残ると中部オープンへ行ける。中部オープンは一度も行ったことがなかったもので、ぜひ行きたかったんだけれど、この試合が4日連続でねぇ。

―― 4日間はキツイですねぇ。

坂『そう、キツイ。来てる人は若いひとばかり、私なんかは年寄りだからね。3日目になったら疲れてきて。初めてクラブが重いと感じた。いつの間にか年をとってたんだね（笑）。それで試合終わってその足で、軽いクラブを買いに行った。』

―― その結果は？

坂『秋のクラブチャンピオンで出したいです。』

―― それでは、試合を離れて、楽しかったゴルフの思い出をひとつ。

坂『家族でやったことかなあ。娘が結婚する前にね、いっぺん家族でやろうと。長男、次男、娘、私ね。私は楽しかったんだけど、娘に「あんなに急かされた大変なゴルフは初めてだ」って言われてねぇ…。』

―― 家族ゴルフでもやはり、クラブチャンピオンの厳しさが出るんですねぇ(笑)。

INTERVIEWER
花井　美紀
(株)コミュニケーションデザイン代表
イベント司会・コーディネイター、
ビジネスマナーインストラクター、
信用金庫協会女子職員講座の専任講師。
TV、ラジオ等で現在活躍中。